様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２８０５

研究課題名（和文）小学校英語教育の教科化に向けた先進的な取り組み

研究課題名（英文）Forward-thinking English teaching methods and activities to enhance English language teaching at elementary schools

研究代表者
植松　茂男（UEMATSU, SHIGEO）

同志社大学・グローバル地域文化学部・教授

研究者番号：４０２８８９６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：研究成果の概要(和文)：本研究は、小学校の4年生から6年生までの3年間の間、どのような先進的な英語活動・英語授業が可能か模索した。その結果、小学校高学年ではCLIL(内容言語統一学習)が一部の教科で実施可能で児童の反応もよく、さらに演劇型英語コミュニケーション授業も国語教育とうまく繋がることがわかった。実施Ｂ市ではこの取り組みを2018年度から取り入れることとなった。しかるに英語の発音、文字の指導などを含めて授業時間数の大幅増（高学年では毎日）が必要であることも、本研究のみでなくCLILを既に導入しているEU諸国の調査研究からも明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this research, I explored what kind of forward-thinking English teaching methods and activities are possible during the 3 years from elementary school 4th grade to 6th grade. As a result, it was found that CLIL (content language integrated learning) can be implemented in some subjects in higher grades (5th grade and 6th grade). The learners were actively involved in the class and enjoyed it. Furthermore, the theatrical English communication approach was successfully appreciated by the pupils and was found to be well-coordinated with the communication class of Japanese language. City B tried to adopt these approaches from fiscal 2018. However, it was found not only in this case but also by research investigations of EU countries which have already incorporated CLIL, that a large increase in class hours (daily in higher grades) is essential in order to implement those visionary English teaching methodologies alongside the conventional teaching of English pronunciation, letters, etc.

研究分野：英語教育学

キーワード：CLIL　小学校英語　演劇手法　英語コミュニケーション　EU

１．研究開始当初の背景

申請者は、これまで 2 つの科研費研究（平成 19～22 年度、基盤研究(C)課題番号 19520530「小学校における英語教育活動の長期的な効果」：平成 23～25 年度、基盤研究(C)課題番号 23520769「早期英語教育の長期的な効果に関する量的・質的研究」）で小学校英語活動が、中学校以降の英語教育にどのような効果をもたらすか、地方自治体（大阪府 A 市）の協力のもと継続調査してきた。

小学校英語活動を経験した生徒と未経験の生徒が、中学校入学以降、どのように英語技能・情意面で、差が出るのかを調査した平成 19～22 年度の研究結果の概略は以下の通りである。

１）「聞く」・「話す」能力に関しては、小学校英語活動を経験した中学生の方が高い。

２）「「読む」能力、「語彙・文法」、「情意面」に関しては、両者の間に顕著な差は認められない。

さらに平成 23～25 年度では小学校英語活動を経験した生徒に対するインタビュー調査及び、担当教員に対するアンケート調査も加えた。その研究結果の概略は以下の通りである。

１）A 市では開始学年が平成 24 年度以降小学校１年生に早まり、総履修時間数も調査開始時（平成 19 年度）より 60 時間増えて計 130 時間になったが，それが中学校 1 年時の英語テストの点数の向上に結びつかなかった。

２）中学 1 年時の英語テストでは、「学校外の英語学習」（塾等）の開始時期が早い（総履修時間の多い）者ほど得点が高い傾向が認められた。

３）生徒インタビューからは、「小学校英語活動が中学校に繋がっている（役立っている）」という回答が多かった。中学校で英語語彙・文法を明示的に習って初めて「そう言うことだったんだと合点する」と言う意見が目立った。

４）教員アンケートからは（生徒のインタビュー・トランスクリプトを読んで)、「不安の中、手探りで授業をやってきたのが報われた」（小学教員)、「われわれがもっと小学校の授業を見て、何を習ってきたか理解しなければいけないと思った」（中学教員）等の感想が目立った。

これらの背景を受け、本研究の中心課題は、前研究で明らかになった「楽しいが、この程度の回数、内容では、顕著な英語技能の向上には結びつかない」現行の小学校英語活動の閉塞感を取り払うことである。

今回の文科省の「グローバル化に向けた英語教育改革実施計画」を好機ととらえ、教科化に向けてはっきりとその効果を出すためにはどのような授業方法・評価が望ましいか、CLIL（内容言語統合型学習）型英語学習，演劇手法によるコミュニケーション授業などの先進的な取り組みから学び、提言したい。

２．研究の目的

本研究では 2020 年度に小学校で英語が教科化される前の段階で、効果的な教授法のあり方について先進的な取り組みを、地方自治体（大阪府 B 市）との共同作業で研究・試行し、2018 年度からの先行実施に間に合うように、その枠組みを創り上げたい。高学年（教科型)、中学年（活動型）のそれぞれにどのような評価方法・指導方法が望ましいかを探る。現行では Can-Do を指標として用いることが検討されているが、そのためには内容がなければならず、可能な範囲で CLIL（内容言語統合型学習）型英語学習の導入を試みる。本研究では CLIL 型授業の実際の運用の可能性・有用性を、効果的なコミュニケーション授業のあり方とともに、中学校への連携の視点も含めて調べることによって探ろうとするものである。

３．研究の方法

（1）CLIL（内容言語統合型学習）の素地作り。

研究初年度の 2015 年には、小学校中学年（4 年生）に於いて次年度以降 CLIL 型授業導入を想定し、様々な科目・テーマを題材に選ぶとともに、指導形態や、言語材料の精査等、児童の反応をもとに「探求的」な試みを繰り返し、CLIL 型授業の初期ステージを作り上げた。B 市立Ｓ小学校では４年生はまだ英語活動を導入しておらず、研究協力者の T 教諭が５年生担当になる２０１６年度から実質的な研究調査体制が取れる。そのため、研究分担者ラッセル・ヒューバート准教授、S 小学校 T 教諭と以下の CLIL 専門書を各自が読み、何ができるかまず CLIL の理解を共有し、ブレインストームすることから始めた。

Increasing Teachers' Competence in CLIL (Lambert)
Uncovering CLIL (Macmillan)
CLIL Activities (Cambridge)
「CLIL 内容統合型学習　第１巻･原理と方法」(上智大学)
「CLIL 内容統合型学習　第２巻･実践と応用」(上智大学)

一方で S 小学校には、私のほうからできるだけ出向き、4 年生の児童と「親しむ」姿勢を大事にした。私の存在に児童が気がつかないようになるまで何度も授業参観をさせてもらった。

しかし、「外国語で文化や知識を学ぶ」取り組みは４年生の時点でも一定の成果をあげるのではないかと考え、研究分担者であるヒューバート先生を１２月に同校に出向いてお話をしてもらい、児童が興味を示すか、どのような心の変化があるのかどうか事前事後アンケートで調べることにした。

内容及びタイトルは以下の通りである。

ヒューバート先生授業「アメリカの人々と暮らし」(4 年１組、2 組　45 分間をそれぞれ 2

回）

（2）CLIL（内容言語統合型学習）の諸外国実施状況の調査

CLIL について、ヨーロッパ諸国にて下記のように先進的な取り組みの様子を研究調査した。2015 年度"International CLIL Conference"（リトアニア、リガ市）参加、聴講ならびに、現地 CLIL 教員と情報交換、及び日本の現状と課題の発表。2016 年度"lingua e nuova didattica (LEND)"（初等・中等教員向け CLIL サマースクール：イタリア・アンコーナ県シローロ）参加、初等・中等学校 CLIL 授業見学及び教員インタビュー（イタリア・トレンティーノ県トレント市）。2017 年度スペインクエンカ大学教育学部と共同研究で、現地初等・中等学校 CLIL 授業見学及び教員インタビュー（スペイン・カスティーリャラマンチャ州クエンカ市）。これらは、学会発表するとともに論文にまとめて投稿した（2017 年度スペインは投稿手続き中）。また、B市教育委員会、S小学校教員・管理職らにもビデオ等で、調査内容をできるだけ共有した。

（3）CLIL（内容言語統合型学習）のデモンストレーション

日本児童英語教育学会、小学校英語教育学会、大学英語教育学会等に於いて CLIL 関連の実践・研究発表をしている教諭や研究者と交流の機会を持つことに努めた。その中で実際に授業を見せていただいた、
国内 CLIL 指導の第一人者である宇都宮大学山野有紀准教授に、2016 年 10 月 14 日(金)に 5 年生 1 組、2 組で CLIL の模擬授業を行っていただいた。B市教育委員会による公開授業として、他小学校教員・管理職・教育委員会関係者の参加を得た。

（4）コミュニケーション授業のデモンストレーション

先進的な取り組みの一環として、劇作家平田オリザ氏に 2017 年 8 月 28 日､10 月 12 日、12 月 7 日の 3 回に渡って B 市 S 小学校 6 年生 1 組、2 組で「コミュニケーション」授業のデモンストレーションと指導をいただいた。特に 12 月は「外国人が町にやってきた」というタイトルで、児童がシナリオを作成し、グループごとに演じるものである。B市教育委員会による公開授業として、他小学校教員・管理職・教育委員会関係者多数の参加を得た。

（5）情意アンケート・英語に関する質問

前科研費研究で用いた高学年（5, 6 年）用の情意アンケート（23 項目）を、パイロットテストで主成分分析し､15 項目まで減らしたものを用いた。これはホームルーム等を使って短時間で実施でき、中学年（4 年生）にも負担にならず実施できるようにと言う学校側からの要望に配慮したためである。学校側と協議の上で渡航歴や英会話教室の経験の有無などの質問項目は省いた。回答に要する時間は約 10 分である。質問項目への回答はこれも学校側からの要望で１：「はい」、２：「いいえ」の 2 択式とした。

（6）教師・生徒アンケートについて

本取り組みは 2015 年から 2017 年まで実施した。毎年、T 教諭が担任する学年から 6 名を、男女比が均一になるように配慮し、「英語」についての振り返りを 10 分以内で聞き取り、それらをトランスクライブして文書化した。それらの文書を他の研究協力者の先生（M教諭）に読んでいただいた上で話を伺ったり、小学校英語活動についての問題点を話し合い、以降の参考とした。

（7）実施時期・形態について

2015 年度から 2017 年度までＢ市Ｓ小学校の研究協力者Ｔ先生の担当学年（1 学年 2 クラス、70 名）を 4 年次から 6 年次まで対象とした。内容は上記（１）を 2015 年度に、（３）を 2016 年度に、（４）を 2017 年度に実施した。また、研究協力者Ｔ先生とは密に連絡を取り合い。時間の許す限り授業観察やインタビューもしくは文書でさまざまなやり取りを行った。

ただし、申請時に引き続き協力の了解を得ていた大阪府 A 市教育委員会指導主事H先生から、「現在大学院にて CLIL をテーマに研究をしているが、指導教官から本研究への協力の許可が下りない」旨、４月の科研採択後急な連絡が入った。科研費調査研究に長年協力いただいた A 市で CLIL 導入を想定し、本科研費研究の準備をしていたため、この連絡に大変戸惑った。

事態を相談したところ、お世話になる予定のＡ市Ｋ小学校Ｈ校長から、以前同校に勤務していたＴ教諭が、この研究趣旨に最も適任であろうとご推薦頂いた。私も以前に同校で氏の「英語で理科を教える」授業に強く惹かれていたが、他市へ移動されたとのことで科研費応募段階では研究協力者として考えていなかった。Ｈ校長がわざわざＴ教諭にコンタクトを取って下さり、Ｔ教諭が現在勤務する大阪府Ｂ市立Ｓ小学校にて２０１５年６月２２日（月）Ｔ先生ご本人と同校校長Ｎ氏に研究の趣旨を説明に伺ったところ、前向きのご返事を頂いた。

Ｓ小学校は小規模校で１学年２クラスのみであり、学年すべての児童に同じ研究上の協力ができる。そのため、このような研究において重要になる倫理的な重要側面のひとつ（あるクラスだけ特別な授業を行う）が大きな障害にならない点のメリットは大きい。

ただし、Ｎ校長先生の方から２点確認があった。それらは１）研究は時期的に２学期からにしてもらえないか、２）現在４年生の担任のＴ先生が関わる学年に限定してもらえ

ないかというものであり、その方向で研究を進めることにし、その後メールのやり取りや、Ｓ小学校で直接お会いして研究をどうやって行くか話し合った。その上で、Ｔ先生のクラス（４年生１組、２組）で、１０月から取り組みの開始となった（９月は行事が多いため避けることとなった）。こうした思わぬ変更の経緯があったため、研究初年度の計画は大幅な遅れを取ってしまった。

４．研究成果

（2015 年度）CLIL（内容言語統合型学習）の素地作り

Ｔ教諭の授業、及び研究分担者 Hubert 准教授の「お話し」に関する 4 年生の反応は以下の通り。

Ｔ教諭の授業に対する反応と学期末インタビューの結果：（反応）全員が食い入るように集中して英語による授業（理科・体育）を愉しんでいる様子がよく分かる（2 回づつ計 4 回全て）。ただし机の並び方を通常の U-shape から、全員前向きに変えると、反応が薄くなる（理科）。（インタビュー結果：主なもの 5 点）・英語は楽しい。・英語でもっと授業をして欲しい。・もっと早くから英語の授業があればよかった。・（Ｔ先生が）英語が話せるので尊敬した。・自分も英語が話せるようになりたい。

Hubert 准教授の「お話し」については以下の通り。(反応) 好奇心旺盛な様子。最初は、先生が平易な英語語彙を使いゆっくりと解説していたが、やはり時間が経つとよそ見をする子供も出てきて、先生が焦りだんだん日本語で話す割合が増えていくのがわかった。トピックとしては、アメリカの人口・面積、民族あたりの説明が子供には難しいようで、反応があまりよくない。食べ物や有名人、ディスニーなどはやはり反応が良く、児童が先生の言葉を繰り返したりする。最後の質疑応答のあたりは、「繰り返し」や「ゆっくり話す」ことを多用し、ヒューバート先生も児童とのやりとりのコツをつかんできた様子。（インタビュー結果：主なもの 5 点）・アメリカ人の英語はわかりにくい。・アメリカには様々な人がいることがわかった。・いつかアメリカに行ってみたい。・しゃべり方が日本人と違う。・日本にはアメリカのものが沢山ある。

2015 年度の成果は以下の通り。

（１）英語を使った授業の導入で児童に内容への「食いつき感」が出てきた。

（２）児童の CLIL への気づきが感じ取れた。「月曜日も英語やってくれるの？」「何で先生英語しゃべれるの？」と子供は楽しみにしている(児童アンケート)。

（３）CLIL には内容の下準備が必要である。わかりやすく、楽しくなければ学びがない。

（４）言語レベルを下げる必要があることが分かった。易しく、わかりやすく、反応しやすく、答えが出る質問をする必要(児童アンケート)。

（５）視野の拡大が必要：動作や音が英語に繋がることが分かった。身体を使うアクティビティーの導入、子供と同じ目線になれるかどうかが問題(児童アンケート)。

（2016 年度）CLIL（内容言語統合型学習）のデモンストレーション

本年度は研究 2 年目であり、以下の 3 点を目標にした。１）Ｓ小学校における新たな英語活動手法(CLIL)の本格的導入。２）国内の CLIL 実践者・研究者との交流や連携の強化、及び授業観察。３）海外の CLIL 実践者・研究者との交流や連携の強化、及び授業観察・インタビュー。特に CLIL が盛んな欧州の中で英語力が最も劣り、教育予算も乏しく教員養成施策が追いつかないイタリアに焦点を当てた。具体的な内容は次の通りである。

①Ｓ小学校長の許可を得て、Ｔ教諭が担当する 5 年生のクラスを指導案作成手伝い及び隔週授業観察、慣れてきてからはＴ教諭と共に指導方法の改善や新しい取り組みを考える。

②日本児童英語教育学会、小学校英語教育学会、大学英語教育学会などに於いて CLIL 関連の実践・研究発表をしている教諭や研究者と交流の機会を持つことに努めた。その中で実際に授業を見せていただいた宇都宮大学山野有紀准教授に、10 月 14 日(金)に 5 年生 1 組、2 組で CLIL の模擬授業を行っていただいた。

③8 月 28 日(日)から 31 日(水)にイタリア、アンコーナ県シローロで開催された lingua e nuova didattica (LEND)第 2 回国際サマースクールに参加。イタリアを中心とする CLIL を学ぼうとする小・中(前期・後期)の教員や、Aberdeen 大学教授の Do Coyle 氏、Calabria 大学講師 Teresa Ting 氏、LEND 会長 Silvia Minardi 氏などと知り合い、CLIL の実践にかかる多くの事柄を学んだ。さらに 2017 年 2 月 20(月)から 24 日(金)まで、イタリア、トレンティーノ県、トレント市に於いて、Sanzio 小学校、Bresadola 前期中学校、Russel 後期中学校にて、授業観察、教員へのインタビューを実施した。

2016 年度の成果としては上記の調査・実践で得られた知見であり、

（１）①に関して。千成小学校の授業に新たな取り組みが取り入れられ、授業が活性化した。他の教員も新たな知見を得た(教員アンケート、教員インタビュー)。

（２）②に関して。山野氏の模擬授業は児童のみならず、教室の後ろや横で見ていた教員や市教育委員会関係者をも惹きつけ、新たな取り組みへの可能性とモティベーションを与えた(教員アンケート、教員インタビュー)。

（３）③に関して。イタリアの小・中学校の教員も、様々なハンディ(英語力のなさ・経済的負担、時間の負担の増大)を抱えながらも CLIL を意欲的に学ぼうとしている姿に勇気を与えられた(教員アンケート、教員イン

タビュー)。また、イタリアで得られた知見は、日本児童英語教育学会、大学英語教育学会等の学会で複数回に分けて発表し、注目された。また、イタリアの CLIL の現状と課題については、論文に取りまとめて投稿した。

（2017 年度）コミュニケーション授業のデモンストレーション

本年度は研究最終年度であり、また「演劇手法」によるコミュニケーション授業を導入することによって、高学年になった 6 年生の児童の知的発達段階に応じた授業の可能性を模索した。昨年度と同じく T 教諭の学年にて隔週金曜日に通い、CLIL を理科、体育、算数において指導案を作成し、実施してもらった。さらに１学期は英語の音素指導を行った。その内容は以下の通りである。

①英語音素についての発声練習。有声音、無声音の区別を中心に。また、それらの組み合わせも。

②日本語との違い（ローマ字を使い、有声音・モーラ中心の日本語音素との発音形態 Sound system についての違いにも気づかせる）

③日常生活で使う便利な表現集を作成。クラスの仲間を相手にランダムにコミュニケーションを取る練習（2 学期以降)。

④プロジェクト：演劇形式のコミュニケーション授業の実施（2 学期以降)。

昨年度から依頼をしていた劇作家の平田オリザ氏に３回来校してもらい、直接演劇指導をしてもらった。台詞作りから舞台まで。

⑤2018 年２月中旬に、昨年度と同じ趣旨でスペインをフィールド調査。初等・中等学校での授業見学と教員インタビューを行った。

2017 年度の成果は以下の通り。

（１）①に関して。

昨年度の基礎的な指導でほぼ英語母音と子音の違いを習得してくれていると思ったのだが、s,t,h,g 等、頻度の高い子音でも単体で発音させると、有声音で発音する者が半数以上おり、改めて 3 年次に教えられたというローマ字表記の音声システムからの脱却が難しいことを確認した。あと、英語 relax sound の schwa に関しても、発音の仕方を忘れているし、発声の仕方（口のかたち）に戸惑っている。学校外でもこうしたローマ字環境、カタカナ英語環境に晒されていると思われ、教室内のみでの習得の難しさを再認識した。もっと時間数が欲しいと切実に感じた(できればイタリアのように毎日)。また、l と r の使い分けで教えた right と light の違いを両クラス、数名の児童が覚えてくれていたことは幸いであった。ただ、Good-by などの歌に乗せて発音する表現については、ほぼ全員の児童が（周囲に合わせてか）きれいに発音できることから、ある程度の定着があるということを確認できた。

（２）②に関して。

これも１）同様、英語に切り替われるかなと期待したが、教えたての瞬間の見事な発音 code-switch ができず、舌や口の形状が日本語のままであり、僅か 5～6 回の授業での限界を感じた。私の授業以外にも T 先生が、何度も確認してくれているはずであったが、定着はしていない。relax sound をさせると、日本語の relax の「あ」の発音がどうしても出てきて、その先の r の発音にまで進まないことが確認できた。やはりもっと時間数が必要なことを痛感した。

（３）③に関して。

5W1H がらみの基本会話集は、毎回の練習により、ほぼ定着している。特にセットフレーズの運用が半年以上経っても有効であることを確認した。

（４）④に関して。

平田オリザ氏に３回来校してもらい、毎回以下のような手順で指導を受けた。

1 時間目：6 年１組

8:50-9:10 プリント配布「外国人が新幹線で広島に行きたいので新大阪に連れて行って欲しいというシナリオ」の役決め、頭出しや語尾を変えるカスタマイズ、動きを入れる（当日のポイント）

9:10-9:25：発表の準備。役割は直ぐに決めている。一度通読、その後何をしてよいのか分からない様子。しばらくすると台詞替えに移る。

9:25:-9:40：発表。外国人の役、習った英語をできるだけ使うように指示されるが、センテンスレベルの英語は出てこない。Hi, thank you, what? sorry, bye など。

2 時間目：6 年 2 組。ほぼ同上の内容だが、子供は活発に動く。リードをとる子が何人かいて、やたらボケや突っ込みを入れてくる。平田先生は「最初の班をまねしている、劇が繋がっていない、瞬発芸に走ってしまっている、立ち位置が違う、自分たちが楽しんでしまっている」などの厳しい指摘をするが、褒めることも忘れない。

3 時間目：両クラス、1 時間目の原稿を元に「B 市を伝える対話劇をつくろう」と言うシート（場所・背景・問題・登場人物）とプロット（4 プロット）をもらい、各班（6 名）で相談。平田氏のオーケーが出たら、シナリオをわら半紙に創作して書く。

4 時間目：両クラス、上演。他人が演技中はしゃべらず集中して聴くこと。10 班のそれぞれ演じる。会話集の言語材料、3 センテンス出てくる。What do you say? Sorry, where is USA? I like it very much.

3 回とも B 市の教育委員会、他の小学校の先生が大勢見学に来ており、児童の躍動感溢れる演技と創作力に感動されていた。次年度から国語のコミュニケーション授業と連携してこの演劇手法を取り入れようと言うことになった。また、平田氏が来ない月にも児童が自分で英語演劇を創作・演技できるようになり、演劇型コミュニケーション授業の有用性を確認した。

（５）⑤に関して。

スペインカステリーヤ・ラマンチャ州クエンカ市にある州立クエンカ大学教育学部英語教員養成課程主任教授 Jesus Moya 氏、准教授 Maria Begona 氏の配慮で 2018 年 2 月 19 日から 23 日まで、3 初等学校、1 中等学校の授業を終日観察、各学校の教員・管理職にインタビューの機会を得た。スペインは、モノリンガル地域と地域語・スペイン語地域が入り交じった複雑な言語環境であるが、モノリンガル地域であるクエンカ市で 3 歳児から英語教育が開始されている様子と、その後の初等・中等学校での様子をつぶさに観察できた。これらの詳細は「スペインの CLIL の現状と課題」というタイトルで論文を執筆中。投稿予定。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 植松茂男・長田恵理、EUの複言語政策と、イタリアに於ける外国語教育の現状と課題 ：日本の小学校英語教育の教科化への示唆、GR ： 同志社大学グローバル地域文化学会紀要、査読有、第9号、2017、79-100

〔学会発表〕（計７件）

① 植松茂男(講演)、「イタリアに於ける CLIL の現状と課題」大学英語教育学会(JACET), 2017
② 植松茂男他 3 名(シンポジウム)「イタリアの外国語教育制度からの示唆」大学英語教育学会(JACET),2017
③ Shigeo UEMATSU(講演), “A Time to Speak. Asian Languages and Civilizations, 2017
④ 植松茂男(講演)、「日本の外国語教育施策を読む」大学英語教育学会(JACET),2016
⑤ Shigeo UEMATSU, “Feasibility of CLIL in Elementary Schools in Japan.” Asia TEFL,2016
⑥ 植松茂男(講演)「小学校英語の『聞く』・『話す』・『読む』・『書く』　４技能をバランス良く育てるためには」、日本児童英語教育学会(JASTEC)2015
⑦ 植松茂男(シンポジウム他 2 名)、「外国語習得プロセス」、日本児童英語教育学会(JASTEC)2015

〔図書〕（計３件）

① 野口ジュディー、植松茂男他 27 名、金星堂、「応用言語学の最前線」2017, 総頁数 343, 担当部分 313-327.
② 大谷泰照、植松茂男他 15 名、東信堂、「国際的にみた外国語教員の養成」2017, 総頁数 374, 担当部分 56-67, 98-108.
③ Shigeo UEMATSU, Springer, “Long-term effect of Learning English.” 総頁数 160

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
http://uematsu-shigeo.net/page.do

６．研究組織

(1)研究代表者

植松　茂男（UEMATSU Shigeo）
同志社大学・グローバル地域文化学部・教授
研究者番号：40288965

(2)研究分担者（2015 年度のみ）

ヒューバート・ラッセル（Hubert Russell）
京都産業大学・文化学部・准教授
研究者番号： 90411016

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）